

第 42 回若手研究者・院生情報交換会 報告

関西大学 福田公教

テーマ：どうなる地域共生社会

～これからの社会福祉の実践・研究・担い手養成のありようを考える～

日時：2018年3月18日（日）13：30～17：00

場所：大阪府立大学 学術交流会館 多目的ホール

第42回若手研究者・情報交換会は、日本ソーシャルワーク教育学校連盟近畿ブロックと関西社会福祉学会・日本社会福祉学会関西地域ブロックの合同シンポジウムとして開催された。テーマは、「どうなる地域共生社会 ～これからの社会福祉の実践・研究・担い手養成のありようを考える～」として、基調講演に続いてシンポジウム、終了後には、懇親会が行われた。

基調講演は、日本福祉大学教授 原田正樹氏より「地域共生社会の実現にむけたソーシャルワークの機能・仕組み・養成」を演題にご講演いただいた。続くシンポジウムでは、関西大学の福田公教のコーディネートのもと、実践の視点から、堺市社会福祉協議会 所正文氏による「地域共生社会の実現にむけた社会福祉協議会の戦略」、研究の視点から、佛教大学教授 松岡千代氏による「地域共生社会における価値に基づく実践(VBP)の必要性和研究」、養成の視点から、大阪府立大学教授 山野則子氏による「地域共生社会を目指す子ども領域・多職種連携教育(IPE)」とそれぞれ発題していただき、シンポジウム間のディスカッションに合わせて、フロアからの質疑が行われた。最後に基調講演を行ってくださった原田氏より総括コメントをいただき終了となった。

ここからは、若手研究者への示唆となるであろう発題やディスカッションをいくつか紹介したい。

松岡氏からは、医療と介護の研究動向から社会福祉研究のあり方への展望が語られた。具体的には、グローバルスタンダードとしてのIPW（多職種連携実践）が求められており、これからの研究では、EBPのみならず、VBP（価値に基づく実践）が施行されるとの報告があった。社会福祉の基調となる地域共生社会の実現に向けて、どこまで地域に責任を持ち込むのか、公的責任とのバランスのとり方や総合的な問題に対応できる人材の育成や確保の課題などが語られた。

今回のシンポジウムは、日本の社会福祉の大きな動きの中で、若手研究者のみならず、多くの参加者にとって、自分の研究の位置づけや方向性を考えるきっかけになったのではないだろうか。まとめとして、原田氏より、2040年を見据えた研究が必要となっており、新たな社会モデルをどう作っていくか検討していくことが必要になっているとの将来展望が語られた。